

社会の発展と共産主義について 2015/5/14

経済学部 2年 トレポフディアス

マルクスが主張していたように、この世界は数段階のレベルを通して発展していく。まず初めに来るのは原始共産制であり、人々は狩猟・採集生活を営みながら何にも制限されずに生きていく。その後封建制や帝国主義を乗り越えた人類は資本主義へと発展する。王政や帝国主義に異を唱える知識層と商人が主体となって、いわゆるブルジョア革命によって権力を自分たちのものとすることに成功した。この時点で民主主義の初期段階は達成されたとと言えるだろう。

しかしこの革命によって人類の大部分を占める農民や労働者といった人々の生活水準が向上するわけではなかった。つまり次の段階の社会主義革命はそういった学のない者や非力な者が主導した運動である。具体的に言うとロシア革命が当てはまる。ロシアではロシア革命によりソビエト連邦が出来上がり欧米の左派勢力に多大な影響を与えた。数十年でソ連は解体してしまうが、社会主義体制というものが現代の世界に残した考え方は非常に重要であり今日の政治に必要な不可欠なものとなっている。例えば男女平等、8時間労働制、社会福祉の充実などである。ソビエト連邦が創立されても王政や自由主義経済を固持した現代の先進国と言われる国々はどれもこれらの要素を取り入れている。日本においては戦後のGHQの影響もあるが、労働組合や男女共同参画といった点でそうと言える。ここにマルクスの「人類は共産主義に移行し国家の役目がなくなることで政府は消滅する」思想につながっていくのだと私は考える。現代の先進国は自由主義経済を取り入れながらも左翼的な社会保障などといった要素も併せ持っている。こうした国家は数百年後に必ず政治が成熟し政府は必要なくなる時代が訪れるだろうと私は考える。要するに人類はゆっくりと真の自由主義経済と真の民主主義を達成するべくして前進している。現に TPP といった自由貿易協定などもこうした大きな流れの一つと言える気がする。マルクス＝レーニン主義とは逆説的ではあるが主旨、というか結果は同じことになるはずだ。数百年後の成熟した体制を共産主義と呼ぼうが、高度に発展した自由主義と呼ぼうが人類が向かう先は一つなのである。

しかしここで一つの疑問が浮かんでくる。国家が消滅した場合何が人々をまとめるのか。何が人々の帰属欲求を満たすのか。企業というものがその役目を担うのか。利益追求組織である企業が都市の治安を維持するのか。それまで税金によって雇われていた警察はいなくなり、人々が企業に属し労働し、その対価として治安を維持するのか。その場合問題点はないのだろうか。数百年後の日本、世界を見てみたいと感じた。

高橋賢 経済2年

ラスキンの主張が他の経済思想とは異なる最大の理由は彼が注目している観点が価値すなわち効用の最大化であることである。これを踏まえつつ以下にラスキンの労働と統治に関する主張について自身の考えを書いていく。

まずラスキンの労働と雇用に関する理論に注目する。彼は労働体系として自然なものは職業ごとの一定の賃金の下で上手な職人が雇われて下手な職人が雇われないものであるとする。彼は雇用に関しては物質的に最大の結果を生み出す雇用関係は一定の思慮と活力を有する主人と召使の関係であると述べる。失業者と青少年に対して職に就く為の支援を政府が行うことも彼の主張である。彼の主張において政府は適切な労働の提供者として労働市場に大きく干渉するのが特徴と言える。

私はこの体系が技術の発展を考えた時には非効率的な賃金体系だと思える。賃金が平等な時、熟練と未熟との間に労働者の質の差が雇用の有無で表されるが、熟練間では賃金と同じなので労働の質の差が表されない。労働の価値の評価額として賃金を見た場合に技術の相対的高さを示すための賃金の差を無くすことは労働者の承認欲求を妨げる。これではある一定以上の技量を求める労働者が現れにくい社会となるだろう。よって賃金体系としては未熟な労働者は雇わずに、一定技量以上の労働者が賃金競争を繰り広げる形式が理想といえる。この体系は彼の述べる政府の職業訓練の役割も充足され、人々に技術を身に付ける誘因を与えることが出来るために意味を成すだろう。

次に彼の理論で注目したいのは統治の手段である。彼は賢人が父権的支配を行うべきであるとする。彼は優れた精神性を有する人が劣った人を支配することを是とする。この考えは数値化可能な理論としては有意義である。少数に決定権・干渉権を委ねることは政治の速度を向上させる。しかし、反対せざるを得ない理由が2つある。その理由の1つは優れた人物とは何者かという問が発生すること、もう1つは芸術や職業といった彼の重視する点に対して父権的な干渉が悪影響を及ぼし得るからだ。

一つ目の理由は、賢者とはどのような人なのかの定義が難しいからだ。そして賢者が情愛を持って各人の利になることをなし続けられるかも考えなければならない。2つ目の理由は支配者が情愛を持って国民の利益になる干渉をすることが出来るのかという疑問が生じるためである。芸術に関して顕著であるが、人によって感受性とその方向性が違うため、後世で評価される技術が政府に支援されずに指導者の恣意的な決定でそれが取捨選択されるかもしれない。また、技術に関しても同様のことが言える。この二点から考えると賢者による父権的支配は実際に適用するには危険だと思える。

ラスキンの労働と統治に関する思想を取り上げてきたが、彼の基本信条である精神的充足

の最大多数化という考え方は今までの経済思想と照らし合わせて興味深いもので、触れなかった芸術に関する提案も納得できる点は多かった。ただ、経済思想という見方をした場合に精神的充足の前提には人々の物質的充足を置く考えのほうがより現実に即している。なぜなら人は飢えている内は深い思考すらままならなくなるからだ。ラスキンの理論を適用するのなら、物質的な欲求を満たし、物質においては現状維持を目標とした社会において適用する必要があるだろう。

経済思想小レポート 1

中西 浩一 北海道大学経済学部 2 年未分属 01140035

2015 年 5 月 19 日

有閑階級は人類の歴史において、しばしばその発展の一翼を担ってきた。例えば、現代社会において高度に文明的な我々の生活の根幹をなす自然科学についてもそうである。17 世紀に第一次科学の制度化といわれる科学的研究成果の共有を目的として、パリ科学アカデミーとロンドン王立協会が設立された。パリ科学アカデミーは、ロンドン王立協会を羨んだ財務総監コルベールによって、ルイ 14 世の資金援助で発足した。会員は年金を与えられ、実験器具や研究手段も国家によってそろえられたいわば政府機関であった。一方、ロンドン王立協会はチャールズ 2 世の勅許はあったものの国庫からの補助はなく、組織は会員の払う会費によって運営されていた。つまり、王立協会の構成員は労働をせずとも一定水準の生活が可能であり、また会費を払う経済的余裕があり、研究という“遊び”に興じることができるほどの時間を持て余していた有閑階級だったのである。王立協会の研究成果は、人類史上のターニングポイントともいえる産業革命に直接的には影響していない。しかし、その後の二次的・三次的な応用分野の発展には王立協会の基礎研究が果たした部分も大きいだろう。

科学の発展に必要な要素を有閑階級に特有の要素から抽出するとすればそれは研究の分野や方法といった方向性を規定されない自由さではないかと考える。私費で研究を行っていたからこそ、自らの望む研究ができ、そしてそれゆえに人の数だけ研究も多様になった。逆に、ソ連は共産主義国家として工業、特に重厚長大な産業に偏重した研究を行っていたために、IC・半導体などの軽薄短小産業で西側諸国に後れを取り、その後世界のあり方を変えたハイテク分野で完全に立ち遅れた。そして他の分野でも綻びはじめ最終的には国家が崩壊してしまった。

科学に限らず何か新しいもの（もしかしたらそれはくだらないものかもしれないが）あるいは実用的でないが文化的に価値あるものを生み出すには、情熱に加えて暇やゆとりといったものが必要であると考え。であるから、私は有閑的なあり方について、についての潜

在能力がある場合には歓迎したい。

参考文献：榛葉豊『王政復古期の科学と郷土階級—王立協会と好学者—』静岡理工科大学紀要 18,85-92,2010

ヴェブレン『有閑階級の理論—制度の進化に関する経済学的研究』レポート

2015年7月14日

大澤啓二

私が本講義でヴェブレンの思想に触れて考えたことは、現在の日本で大学に行き、学ぶことがいかなるステータスとして機能するかわかなる意味を持つか、ということだ。彼は『有閑階級という制度がその最高の発展を遂げているのは、たとえば封建時代のヨーロッパや封建時代のヨーロッパのように、野蛮時代の文化が高度化した段階においてのことである。』(11)と述べており、そこからさらに高度化した現代の日本社会には必ずしもあてはまらないだろうが、まずは思索してみることが肝要であると思う。実生活に役立たないとしても、そういうことに時間を費やすことが有閑を示すことにもなりうるのではないか。

さて、大学というのは本来、学問を修める場所である。その中には歴史学・芸術学など、実生活にはおおよそ役に立たないとされるものもあり、だからこそいわゆる製作者本能(いわゆる生産性を求め、不毛であることを嫌う感情)からすれば浪費であり、忌避されてきた。それをあえてすることが、有閑階級からすれば余暇があり、十分な富があることの証明であり、誇りであるというのはヴェブレンの言うとおりでである。

しかし現代の日本では、社会的なステータスとしての大学は、有閑階級の証としては機能していないように思われる。大学進学率は50%ほどにまで上がり、不況からくる就職難により、学歴による選好に対応するために青年は偏差値競争に身を投じている。つまり大学進学は社会に出て成功するために必要なプロセスとみなされており、それはかつてなされていた武器を用いた戦闘に通じる思考があると考えられる。日本の社会においては、(よほどの金持ち、真の有閑階級を除いた)大学に行くことをまず考える人々の社会には、有閑階級は存在せず、大学は単なる就職予備校にすぎなくなっている、ということだ。

ステータスとしての大学が変質するその一方で、大学の学生の日々の生活はもっぱらヴェブレンの言った有閑階級の人々そのものである。

日々をのんびりとサークルや友人との遊び、生産性を必ずしも目標としないアルバイトなどに費やし、学問は気の赴くままに、とまでは言えるかわからないが、おそらく常に生産

性を高めるために生きている学生はわずかであろう。かつてとは違い、大学を出てからは余裕のない、それこそ効率を求める経済システムの一部になることを予期しての、モラトリアムを謳歌するかのような振る舞いと言える。

これら二つの相反する傾向を大学が持っていることはたいへん不思議に思える。私としては、大学で学ぶことが社会的にだけでなく、自分に何をもたらすか、どういう意義があるのかを考えているのなら、有閑階級と経済システムの一部のどちらに傾こうとかまわないとは思ふ。要は自分で立ち位置を決めるべきだということだ。

北海道大学経済学部 2年 横田惇

2015/7/13

ヴェブレンについての講義で初めに頭に浮かんだことはヴェブレンのいう有閑階級とは現代でいう高等遊民であるということである。高等遊民とは明治時代ごろに生まれたもので、高等教育機関で教育を受けたにもかかわらず経済的に困っていないので生産的な活動を行わない人々のことである。財産や所有物を多く持っていることから働く必要がなく、故に暇を持て余している。その暇を、本を読み耽ったり音楽鑑賞をしたり、道楽をすることによって消費している。これら高等遊民の行動は有閑階級の時間の非生産的消費と似ているのである。それゆえ、私は講義中に有閑階級は高等遊民の事だろうかと考えたのである。しかし、講義を受けていくと、競争の末に財産を得て暇を手に入れた英雄的地位にいる人々も有閑階級の一つであるというのである。そのような人々は作法や礼儀を身に付けており、上品であるという。このあたりから有閑階級と高等遊民は少し違うのではないかと感じ始めた。さらに、有閑階級は規範を与える階級であるということが、自分の思うままに自己満足的に自分を高めるのみの高等遊民と決定的に違うと考えた。つぎに、個人的に有閑階級の行なっていることは今の日本を見ると必要だと考えた。今の日本には余裕が無いように見える。外国の文化が絶対とは言わないが、外国のスポーツや音楽や道楽に対する情熱は大事なことだと考える。効率性を求めている日本の現状には余裕がなく、道楽と言いつつしていることも何かの為にやっているように感じる。誰しもが有閑階級のような暇を多少なりとも持っている必要があると思うし、持っていることが大事だと考える。その暇を非生産的消費することによって、そこに経済が生まれるだろう。これに関連して、講義の後半に女性のハイヒールやスカート、長い髪が出てきたときに納得した。これらが例として出てきたのは機能美の逆を行っていて、労働していないことを示す顕示的消費の説明であった。効率性を求める上では必要ないことであるのにスポーツなどの娯楽と同じように必要なことであ

ると考えた。

ハイエクの思想には納得することが多かった。例えば、「均衡という概念は、利用可能な生産手段の完全な情報があつて消費者の選好は所与であるという静学的な状態を想定している。しかし現実には、市場経済は、完全情報を想定する均衡状態からは程遠いので、欠陥だらけの制度に見えてくる。」という解説だ。経済学者が理想とする動きを消費者がすることは難しく、現実には起きている競争による均衡は理想の均衡状態ではないのだと感じた。一方で、その均衡状態が理想では無いせよ、理想に近いものとなっている理由も納得できるものであり、さらに市場が自生的であるというのではなく、この自生的な秩序化作用を社会的に有効利用しようという考えも賛同できるものであった。解説を聞いていくうちにハイエクの思想は理想通りのものであると感じた。しかし、なぜ理想といえるハイエクの考え方が存在しているのに現状では問題が起こっているのか不思議である。今回はその点について考え、記述する。第一に、ハイエクの考えのように人々の持っている断片的な知識や欲求を集計できないからである。ただ、その理由は少し違って、技術が無いから集計できないのではなく人々が発信できないからだと考える。現代社会はリーダーがいて、リーダーに従う者がいる。リーダーに従う者はリーダーによって押しつぶされているのが現状だ。第二に、ハイエクは政府の介入を出来る限り無くすように言っているが、予期せぬ市場の動きを対処できるのは政府であり、時には市場の成長を制御してでも政府が介入しなければならないことがある。そういった時にどこまで民間に任せ、どこまで政府に任せるかの線引きが非常に難しいと考えられる。

ハイエクの思想で間違っている点は本当のところ、見つからなかった。ゆえに、ハイエクの思想に関して言及しづらく、批評・批判することが難しかった。ただ、果たしてハイエクの思想通りに実行できるのかを考えた時に、できると断言できないだろうと思った。このようにすればいいということは分かるのだが、どの程度、どこまでそうすればよいのかの判断は紹介されていない。現状では、その「程度」に最も重点を置く段階に来ている。そういったことを考えると、ハイエクの思想は理想論だという位置づけにせざるを得ないと感じた。ラスキンは経済学について以下のように語っている。『真の経済学という学問は、生命に導くようなものを望み、かつ働くこと、また破壊に導くようなものを軽蔑し、破棄することを国民に教えるような学問である。経済学という偉大にして唯一の学問は、なにが虚栄であつて、なにが実質であるかを国民に教え、また浪費の君、永遠の空虚の君である死に仕えることが、節約の女王とどんなにちがうかを国民に教えるのである。』（2015 橋本努 講義レジュメ）語っている内容は大部分が共感できることであるが、「破壊に導くようなものを軽蔑し、破壊すること」という点には疑問を抱いた。破壊に導くようなものというものは具体的に『真珠とか青や赤の石のかげらのような無用の長物を価値あるもの』

それらを得ようとして水に飛び込んだり土を掘り起こしたり、またそれらをさまざまなかたちにカットしたりするのに、生の増進と向上のために用いられるべきはずであつた多大の労働を費やすならば——あるいはもし、国民が同じように幼稚な状態にあつて、空気とか光線とか清潔といったような基調で有益なものを無価値であるとする』ことである。後半の環境を軽視することは間違いであるというのは外部不経済につながるもので正しいと思うが、前半の宝石に価値を置き、それに対して労働することがおかしいというのは誤りであるとする。宝石に価値を置いている理由は明確には分からないが、確かにそこに経済があると思う。宝石の需要があり、宝石の供給をするということは、他の商品のそれと何ら変わるものではない。結局、現代では環境問題などがあり、外部不経済が実際のものとなつてしまつたが、そういったことを無くしていこうという技術が生み出され、完全な破壊にならないよう上手く回す努力をしている。このような新しい対処方法があれば、ラスキンのいう破壊も破壊でなくなると考えた。

講義を通し、様々な先人の思想に触れることで、これまでの私の意見と照らし合わせ、比較することができ、刺激となつた。また、先人たちの考え抜いた思想がありながらも現在の経済に問題がある理由を考えることができ、経済を動かすことの難しさを痛感した。

北海道大学経済学部2年未分属 山川 佳恋

2015年5月18日

人間の効率性を好み不毛性を忌む本能をヴェブレンは製作者本能と挙げている。日本の社会構造でも製作者本能の強い者が求められる。しかしこの製作者本能が強いということは本当に称えられることなのだろうかと度々感じさせられる。

もう幼稚園や小学校から試験というものが存在するが、これは製作者本能の強い者を求める社会構造の一つである。試験で悪い点を取ると周りから非難の目を向けられ、良い点をとると称賛の眼差しを向けられる。学校の勉強に全く興味がなく他の何かに対する探究心が旺盛であっても、結局はいかに社会で有益とされる学校の勉強ができるかが重要視されている。そして社会が製作者本能の強い者を求め続ける限り人間は製作者本能に従った行動を永遠に続けるのであるが、この製作者本能の強い者はある日別の人種に出会うことによって製作者本能が強いということは例え周りに称えられたとしても本当に素晴らしいことなのだろうかと疑問をもたされてしまうのである。その別の人種とは製作者本能関係なしに勉強をしてきた者である。

彼らは製作者本能に関係なく、また優劣の心地よさ（周りから褒められることを含む）で

はなく、自らが勉強したくしてきた者である。そんな彼らの存在が優劣の心地よさで試験を乗り越えてきた者にショックを与えることがあるのだ。何を勉強したくてここにいるのだろうかといった疑問を自分に問いかけるようになり、試験とか入試関係なしに自分の興味で勉強がしたいという欲望を知らず知らずのうちに求めていたりしてしまうわけである。

製作者本能によって社会は効率よくまわり、発展することができたと言っても過言ではないため製作者本能それ自体を否定することはできない。しかし製作者本能に従って試験や受験などを乗り越え、別の人種と出会いショックを受けた一人としては、何故か何らかの虚無館に襲われて製作者本能が強いことはどうしても称えられることではないと感じてしまう。

2015年5月18日北海道大学経済学部2年

笹井 見智

私はこの授業で初めてヴェブレンという人物とその思想を知った。私がヴェブレンの意見を知って最初に感じたことは、私が今までに一度も考えたことのない方向性であるということである。ヴェブレンは私に新しい視点を与えてくれた。

ヴェブレンの考え方について、私は同意する点と疑問に思う点があった。

まず同意する点について述べたい。私が同意する点は有閑階級制度についてである。有閑階級制度とは、レジュメから引用すると

「下層階級から可能なかぎり多くの生活手段を取り上げてその消費を減少させ、結果的に、新しい思考習慣の習熟や適応に要する努力の遂行を不可能にしてしまうほど、彼らの利用可能なエネルギーを減少させる。こうして、下層階級を保守的にする、というわけである。」このように説明されている。私はこの文章を読み、現代の所謂ブラック企業で例えることができるのではないかと感じた。というのは、サラリーマンと呼ばれるような社員にサービス残業などをさせ、労働以外の時間と本当はもらえるはずの給料も与えない。これは裕福であるはずの会社の重役、つまり有閑階級が下層階級であるサラリーマンから可能なかぎり多くの生活手段を取り上げてその消費を減少させる、ということになると考えられる。これは現実の生活の中であることであるが、人々の大切な時間と給料を奪っているので、この制度はなくなるべきであると考えます。

次に疑問に思う点について述べたい。私が疑問に思った点は保守主義についてである。裕福な階級、つまり有閑階級の人々は保守的であるということであるが、有閑階級の人々がその余っている時間を使って膨大な知識を得て、その知識とひらめきによりさまざまな道具や

思想などを発明してきたと私は考えるからである。つまり、有閑階級の人々がもし本当に保守的であるならば、そのような革新的なものを発明することはなかったはずである。しかし、現代はここまで発展したのである。このことから私は有閑階級の一部の人々だけが保守的なのではないかと考える。

私たち大学生は二次的な有閑階級であるが、この有閑を使ってどれだけの知識を得て、どれだけのことができるのか、ということを考えさせられた。そして同時に私はこの大学生活でどれだけの時間を無駄にしてきたのかということ思い知らされた。これからの残りたった2年半しかない大学生活をもっと有意義なものにするべきだと感じた。

中森 勝也

2015/05/19

有閑階級とは、文化人、成り上がり者、地主、高所得者層といった、時間に余裕がある暇な人たちを指す。お金には余裕がない一方で、時間には余裕があるという点では、大学生は二次的な有閑階級といえるだろう。こうした閑暇を持て余す人々は、顕示的閑暇、つまり、いかに自分が暇であるかを競い合うようになる。こうした競い合いが進行すると、人々は、顕示的消費を行うことにより、自分がいかに暇であることを示すようになる。こうした有閑階級にある人々は、保守主義である。有閑階級の人々は、既得権勢力であり、暇で上品なことを好み、古いものを嗜む。言い換えれば、新しい文化の創出を阻害する要因にもなりうる。ヴェブレンが唱えた有閑階級の理論は以上のようなものであった。

次に、現代社会に当てはめて、顕示的消費を考えてみる。ヴェブレンは、金銭的な文化表現として衣装を挙げていた。優雅なドレス、ハイヒール、スカートといった衣装は、非労働的な格好であり、顕示的消費を行う姿を表している。現代においても、同様の傾向があるといえるだろう。例えば、上品な身なりをし、高価なファッションアイテムを身に纏った人を見れば、きっとお金に余裕がある人なのだろうという判断や、きっと優雅な生活を送っている人なのだろうという判断を自然にしてしまう。この点で、上品な身なりをし、高価なファッションアイテムを身に纏った人は、人々の羨望の的となる。高価なファッションアイテムの代表例には、ブランド品が挙げられる。ブランド品は、宝飾品や時計、バッグなど高級品と呼ばれる商品カテゴリーに多い。ブランド品は確かに品質や素材などの点で優れているものが多いだろう。しかし、品質と価格とを考慮すると、ブランド品よりも、コストパフォーマンスに優れ、機能性もずっと優れた商品はたくさん存在する。そうであるのにも関わらず、こうした商品が購入されるのはなぜだろうか。この背景には、決して有閑階級ではない（有閑階級になれない）人々が、ほんの少しだけ有閑階級になった気分を味わいたいという

動機や、有閑階級であると他人から思われたいという動機が存在すると考えられる。別の例で、顕示的消費を考えてみる。最近、「プレミアム」と謳った商品が急増している。プレミアム・ビールに、プレミアム・アイスクリームなどなど、あらゆるカテゴリーの商品がプレミアム化している。こうした商品は、確かに、品質は良いだろうが、プレミアム商品と、プレミアムではない普通の商品の違いをはっきりと認識できる人はどれだけいるだろうか。違いが明確に分からないのに、「プレミアム」という名前や、それに伴った高価格という要素に惹かれて、こうした商品を購入する人々の心理とは一体何であろうか。こうした商品を購入する人々の背景にも、ブランド品と似た動機が存在すると考えられる。プレミアム商品は、ブランド品よりもはるかに安価に、かつ手軽に購入できる。この点で、プレミアム商品は、ほんの一瞬だけではあるが、日常生活のなかで簡単に、有閑階級になった気分させてくれる。

現代の日本社会では、平均的な労働者の生活は以前よりも困窮する傾向にあり、高価なブランド品を購入することは容易なことではなくなりつつある。その結果、ブランド品を購入し、人々に見せびらかすことで満たされていた人々の欲望は、プレミアム商品の購入といった、手軽に欲望を満たしてくれるものの消費へと向かっているのではないだろうか。この点で、現代では、見せかけの有閑階級は社会に幅広く存在しているといえるだろう。

2015年7月14日

経済学部 武山彩花

今回のテーマは、「有閑」についてであったが、私はその言葉の意味を知らなかったため、その意味を知ることから始まった。「有閑」は、簡単な言葉でいうと「ヒマ」ということであり、私のイメージだと、昔の時代の海外（特にヨーロッパ）では、毎日優雅に、何かに追われることなく過ごしているというものであった。主にその私のイメージが当たっていたのは、ヨーロッパにおける上流階級の人たちについてであった。また、こういう人が「ヒマ」なのか、ということがたくさん学ぶことができた。ヒールやコルセット、スカート、長い髪の人には「ヒマ」だという考え方が、私にとってはとても新鮮であったが、とても納得させられた。そのように考える理由は、今日私や私の友達はヒールを履いていたり、スカートをはいていたり、髪が長かったりするの当たり前のようになっているからである。確かに、スカートをはいていたら作業できないのに加えて、長い髪では作業の邪魔になってしまうので、これらを持っているということは、「ヒマ」な人特有のものだ、と気づかされた。

そして次に、時代の移り変わりについての私の持った考えについて述べていく。初めは、平和愛好的段階からスタートして、勤勉な人がたくさんいることから始まったのにもかか

わらず、それとは真反対の、勇敢な人が数多くいる、戦闘段階へ移行してしまったのはなぜだろう、と私は考えていた。しかしそれは、時代の移り変わりから見ると必然的であるのに加えて、ずっと平和な世界に生きるのは、人間的ではないのではないかと、とも思い始めた。確かに、誰も何も争いごとを起こさず、仲良く暮らしていくのは、とても理想的だと思うが、そうした状況が長く続くと、人間としての考える力がどんどん衰えていくのではないかと考える。一人ひとりが違う考え方を持っているから争い事が生まれるのであり、逆にいうと、ずっと平和であるということは、本当にみんな同じ考え方しか持っていないか、あるいは、気づかないうちに誰かの考え方に染まっていたり、考えを合わせていたりしているのではないかと、私は考える。私としては、前者であることはまずあり得ず、たとえありえたとしても、実際考え方が同じならば仕方がないと考える。よって、後者である可能性は高く、気づかないうちに、人の考えに乗っかることに慣れ、それが当たり前になってしまっているということである。よって、平和愛好的段階から戦闘段階へ移行していくのは当然のことではないかと考える。

時間の非生産的消費をすることが人に規範を与えるというのも、今日の講義を聞いて、とても納得できた。有閑紳士の作法を身に着けるには、やはり時間が必要であり、労働に時間を取られてしまっている下流階級の人たちにはできないことだ。時間があるから鑑賞力や識別力が上がり、規範となるというようなつながりは当然である。しかし、考えれば考えるほど、納得させられた。

一つ上の段階を理想としていたという考えは、今でも続いていると考える。一つ何かを達成してできるようになると、また上を目指そうとする。それが競争意識を生み出す原因となっており、製作者本能にも通じる。私は競争が生まれることはよいことだと考える。平和なことは大切だが、競争が生まれることでお互いがより良いものを生み出そうとすることで、今までにないほどすばらしいものが生み出される可能性があるからだ。確かに、競争でも競争のようなものはいけないと思うが、何かの作品や商品でもっと良いものを作ろうという競争ならばむしろあるほうがよい。このように考えてみると、昔も今も考えは同じだと思った。

経済思想レポート

著者 仁戸田 克文 学籍番号 01145029 日付 7月14日

今回の「ヴェブレンの有閑階級の理論」は過去から現在に至るまでの社会のプロセスの中で、経済活動に従事してきた様々な階層の人間の特性をよく表していると思う。

有閑階級の発展のプロセスは、競争心を根源としている。これはほかの誰よりも優位にた

っていることを証明するある種の指標を必要とする。第一に、「財の多さ」。第二に効率的であるほど、評価が高いとされる、「非下賤的労働に従事しない」。第三により多くのものを消費するほど良いとされる、「顕示的消費」。逆に、下層階級に分類される人々は「財が少なさ」、「非効率的な勤勉さ」、「節約」で特徴づけられる。これは一般的なお金持ちと貧乏人の特徴と合致する。例えばある工場を経営する社長と、工場の従業員を考えてみる。社長は工場で製品を作りはしないが、書類や命令を通して、会社の方針を決定することで多くの利益をあげる。それに対し、工場の従業員は毎日地道に製品を作り続けるが、社長に比べて賃金はすくなくなる。社長と従業員のコストパフォーマンスの差は大きい。また、より多くのお金をもつ社長は、より多く消費ができる。高級車に乗ったり、高級な時計やスーツを身につけたりすればそれだけ優越感を得られる。それに比べ、お金が少ない従業員は、無駄な消費を抑えなければならず、節約にはしる。

これらのことは、有閑階級の保守主義化をうむ。有閑階級はより多くの消費をするだけでなく、儀礼、眼識、作法を備えた存在であろうとする。これは社会の規範となり、下層の人々の手本となる。また、有閑階級が財を成すために利用したある種の行動パターンは、彼らにとって心地のいいものであり、決して変化を望もうとはしない。そのため、社会の革新を恐れる。結果として、保守主義にはしり、下層の人々に、自分たちと同じようにさせようと、社会の発達を阻害する。IT 技術などの新しい技術が最初は、人々から嫌悪感を抱かれたことからこのことは正しいとおもう。一般的な見解からも、より効率的な提案があつたとしても、その提案を、当時の社会の中で最も権力をもつ世代や階層が受け付けないと、無駄になってしまう。頭のかたい老人が若者の音楽や消費行動に対して、批判的な意見をもつことも同様だと思う。現代の日本は少子高齢化社会で、さらに経済状態の悪化から、実質的に多くの財をもつものは若者ではなく老人たちだ。老人たちの力が大きければ大きいほど、若者の意見が世間で受け入れられる可能性はますます低くなるだろう。

久保美沙紀 経済学部 2年

2015年5月19日

今回の講義では有閑階級の非生産的な時間の消費行動について学んだが、私はマズローの欲求階層説を当てはめると興味深い事実が浮かび上がると考える。マズローの欲求階層説は、低次から、生理的欲求、安全の欲求、所属と愛の欲求、承認の欲求、自己実現の欲求と、五つの段階がある。ここで、ヴェブレンの主張する有閑階級の人々が起こすレジャーの行動は、内容は最高次の欲求である自己実現を追求するものであるのにも関わらず、その動機は、一段階低次の承認の欲求にあると考えられる。有閑階級の人々は、自らの観賞力や認

識力を高めるために時間を費やすが、それは英雄的地位の確立という承認欲求を満たすためであって、自らを高めたいという純粋な思いで行動をとっているわけではない。以上のことから、ヴェブレンの考え方を適用すると、マズローの低次の欲求が満たされることにより高次の欲求を欲するという段階的な説、そして欲求同士の位置付けは、必ずしもすべての場面において適用される訳ではないことが分かる。

ここで、なぜ有閑階級の人々においては欲求階層説が適用されないのか、革新勢力の人々と対比し、その性質を考察していく。二者間の違いで顕著なものは、有閑階級はすでに国民内のヒエラルキーの上部に位置するのに対し、革新勢力は中部または下部に位置する点だ。ヒエラルキー上部の者が国民の規範を形成し、下の者がその規範に従う。つまり、革新勢力の人々と違って、有閑階級の人々はヒエラルキーの上部にいて、すでに存在を世間に承認されているのである。このことは、彼らの意見が規範となって世間に通用することから明らかである。

しかし、下層の人々は新しい文化を形成し、常に有閑階級の人々の地位を脅かす。このことにより有閑階級の人々は、すでに世間に承認された立場であるにも関わらず、下層の人々への警戒から、その立場で承認されたと満足することができないのである。そして、立場を承認され続けるために取る行動が、マズローの言う自己実現欲求を満たす行動と合致する。というのも、自己実現は彼ら自身の立場や権力の顕示につながり、承認欲求が満たされるからである。

以上のことから、有閑階級の人々においては、その特異的な地位から、自己実現の行動は承認欲求を満たすためのものであると言える。

現代日本における賢者による統治理想の実態と打開策

経済学部 2年 金川聖也

ラスキンの述べる賢者による統治の理想は、年齢を重ねる度人間が賢明かつ親切になっていくという考えと密接に関係している。この考えに基づき、ラスキンは 20 歳の人間に一票を、50 歳の人間に十票を与えるべきだと主張しているが、しかしこれは、とりわけ現代社会においては、実現にあたって大変な困難を伴う。というのも、一人一票という平等の原則が確立されていることはもちろん、技術革新のスピードがあまりに速くなり、産業分野は以前と比較にならないほどに拡大し、また世界情勢が急激に変化するようになった現代において、今日の賢者が明日の愚者となっている可能性は彼が生きた時代のもの以上に高くなっているためである。

ここで仮にラスキンの考えが正しいとすれば、今の国会などは、それこそ大賢者による国家の最高機関であるが、例えば IT 産業の全盛期である現代において、彼らは 20 歳にも満たない若者よりもその道の愚者である可能性は極めて高い。これは国会議員に限らず国民全体について言えることであると考えられるが、そうであればラスキンの言う人々の賢明さおよび親切さに、つまり年齢に比例した票を与えることは、新たな賢者の出現を妨げるものであって、時代に合わせた国家の発展を阻む要因となる。確かに様々な経験や知識、実績を総合して賢者と判断される人間が国を治めることが望ましいという点については理解できるが、従来賢明さで年上に劣ると考えられてきた若者がかつてないほどに活躍するようになってきた現代においては、ラスキンの提案の妥当性には疑問を抱かざるを得ない。また賢者であるはずの高年齢層が将来の世代のことを考えなくなり、自身に都合の良い政策ばかりを実行する愚者になったとき、若者の側にはこれを止める力がないという問題もあり、人間の善に期待するラスキンの思想は楽観に過ぎると言える。

しかし、ラスキンの賢者による統治の理想は、現代の日本において、全く完全な形としてではないが、実現しているとも考えられるのではないか。なぜなら、少子高齢化によって、また若者の投票率低下によって、事実上この国を治めているのは「賢者」に他ならないと考えられるからである。年齢に比例した選挙権を与えなくとも、現状において人数が多く最も選挙権を行使しているのは年配の人間であるから、相対的に「賢者」の票数は「愚者」のそれに比べて多い。したがって、個人の持つ票数という絶対的な尺度ではなく、年齢層ごとの票が全体に占める割合という相対的な尺度で図ることによって、日本の政治形態が実はラスキンの理想を少なからず反映したものであると言えるのである。この事実は、先述の理由から、今後の日本の発展にとって、望ましいものであるとは考えられない。

それでは、よりよい選挙権のあり方とは、一体どのようなものであろうか。ここでは現在の賢者による統治の現状を打破するものとして、世代別選挙区制の導入を主張したい。世代別選挙区制とは一定の年齢層ごとの票数が一致するように選挙権を割り当てる方法であり、これによって今後減少が予想される若者が人数の多い高年齢層と同じだけの影響を政治に与えることができるようになる。ここで問題となるのは一人一票の平等原則であるが、持続的な社会というものを考えたとき、個人の権利はその実現のために制限されて然るべきであろう。ここに至り、ラスキンの理想、とりわけ年齢と賢明さおよび親切さの比例という幻想に基づく「偽の賢者」による統治は現代政治から淘汰され、かつての賢者はその特権的地位を下げざるを得なくなる。そして彼らは、かつての愚者の内から生まれた新しいタイプの賢者との共同によって統治を行うことになり、ここに「真の賢者」による統治が生まれる。我々はこの「真の賢者」による統治によって、絶えず国家にイノベーションをもたらし、時代に合わせた柔軟な発展を遂げていかなければならないのである。

芦澤万里音

2015/07/13

暇ということについて、講義を受けて考えたこと

大学に入り、今の学部学科に所属されてから、「暇」ということについて考えることが多くあった。「暇」をなんとなくマイナスのニュアンスを持つ言葉と感じていたが、それはなぜか、暇な人は忙しい人よりも劣っているのか、忙しい人と暇な人の違いは何か、など。最近になって、暇というのは何もしないことを意味するのではなく、何かをできる可能性を持っている状態、人の主体性を生かせる状態、と考えるようになった。また、暇であることは劣っていることと感じることは、忙しい人（すべての人というわけではないが）の、暇になりたいがなれないという嫉妬のような気持ち、また自分の忙しさを示すことによって満足しようとする行動から来ていると考えてみた。時間の使い方は次のように分けることもできると考える。やることが決められていて、それをこなすために使うか、自分でやることを決めて、それを行うために使うか、の二つである。同じ「時間を使う」というのでも、前に挙げた二つは違った意味合いを持つと思う。他者にやるべきと決められたことを、何も考えずにこなすことは、大変な上、自分のためにならないと思う。そしてこれは、自分の行動の意味を求めて、忙しさや自分が行っていることを他人へ誇示するという行動へつながると考える。暇、すなわち自分の行動を自分で決められる場合、より自分が納得のいくように時間を使えると思う。暇な時間をどう使うか、ということについて、私にとって自分の心のバランスを保つために、音楽や芸術鑑賞などの文化的な活動が欠かせない。だが、音楽や道楽的なものだけをやるのはよくないと思う。文化的な活動は *taste* を養うとはいっても、それだけをやっていては深められないと感じる。文化的な活動をやりつつ学問もすることで、さらに自分の芸術に対する眼識に深みを持たせる、あるいは、勉強をしながらも、時々芸術に触れることで、人間としての優雅さ、上品さを持ち続ける、というのが良いと思う。また、文化的な活動は、人に顕示するためでなく、自分のバランスを保つために行ったとき、それを行う意味が生まれてくるのではないかと思う。大学生の暇な時間を使って、どういう自分になりたいのか、そのためにはどのように時間を使えばいいのかをよく考えたい。